

「自立をめざして」

～子どもたち一人ひとりが主体的に活動・体験できる生活科～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

学校提案では【学びをデザインする】ことを学ぶ筋道を考えて課題解決に向かうとしている。そこで今年度、生活科部は「学ぶ筋道をまず明確に認識し、それらを次の課題に活かして解決に向かおうとする」と考えた。それは子どもたち一人ひとりが「わかった」「なるほど」に至った過程や新しい「どうして」「なぜ」は自分からどうやって生まれたのかを認識できることが「学びをデザインする」ことにつながると考えるからである。

子どもたちの生活は「なんでだんごむしは丸くなるの」「ちょうちょはどこからとんできたの」「これを押したらどうなるの」「警備員さんっていつ帰るのかな」「校務員さんも給食食べるの」・・・といつも多くの「なぜ」「どうして」にあふれている。この思いは言葉として、行動として分かりやすく表出することもあれば、そうでないこともある。また学習活動、休み時間や帰り道などの学校生活また家庭生活などいろんなところでどんどんあふれ出している。常に、子どもたちはたくさんの「なぜ」「どうして」をもっている。そして「なぜ」「どうして」が「わかった」「なるほど」に変わった過程がはっきり認識できないことは子どもたちの生活で日々起こっている。これは発達の段階から考えて、子どもたちにとっては当たり前である。自然と変わっているのだろう。だから「どうして分かったの?」と問いかけても、「分からん、けど分かった」と答えることが多い。変わったときの子どもたちはとてもうれしそうである。子どもたちにとっては、「わかった」「なるほど」が大切で楽しくて、「どうして変わったのか」の過程は重要ではないのだろうと考える。

しかし、この過程の中で子どもたちはたくさんの学びを生み出している。今までの生活経験・体験を思い出して考えること、友だちといっしょに話しながら思いをまとめていくこと、実際に試してみることで、自分たち以外の人に尋ねてみることなど、様々な過程を経て、「わかった」「なるほど」に変えているのだと考える。あわせて「わかった」「なるほど」は1度で終わりではない。次への「なぜ」「どうして」を生み出していくのである。「わかった」「なるほど」・・・、「じゃあこれはどうして?」「なぜこれはちがうの?」と思いが終わることなく続くことで、学びが深まったり、ひろがったりしていくと考える。また子どもたちの「なぜ」「どうして」から「わかった」「なるほど」がどんどん繰り返されることで“ひと・もの・こと”のもつ真理や価値に近づいていくことを願っている。

このことから、子どもたちが主体的に学習活動に取り組み、一人ひとり課題解決に見通しをもつことが必要である。そこで、生活科の研究テーマを「子どもたち一人ひとりが主体的に活動・体験できる生活科」とした。

また、子どもたちはたくさんの「なぜ」「どうして」をもっているのに、「今、ふしぎに思っていることある?」と聞かれると「ない」と答えることが多い。

これは、子どもたちが今を生きているからだと考える。見るもの・触れるもの、体験したことなどその時に「思い」があふれるのだろう。「思い」があってもそれに気付いていないこともある。また、「分かった」「なるほど」になる前に、新たな「なぜ」「どうして」が次から次へと現れてくるので、それに至らないのかもしれない。同じように、いざ不思議に思っていることを聞かれても、どんどん消えていくのかもしれない。

けれど、このような中で「なぜ」「どうして」の思いが強く残り、「わかった」「なるほど」に変えたい、変わったということがある。それは実際に何度も何度も見るもの、体験すること、してきたことであると考え。日々の生活で一度きりでなく、よくみる、よく出会う、よくかかわる“ひと・もの・こと”には強い思いを抱いていると考える。このことから、子どもたちにかかわりの深い“ひと・もの・こと”に対して持っている主体的な

「なぜ」「どうして」を大切にしながら繰り返し学習活動に取り上げていきたいと考える。

そして、逆にかかわりすぎて思いがもちにくい当たり前のことに対しても、教師が繰り返しきっかけづくりをしながら、様々なことに気づきが生まれることをねらいたい。そして、そこから子どもたちは、自分たちの生活を支えている人や、自然のしくみ、社会のルールやマナーなどの自分に直接かかわっている部分と、間接的にかかわっているがとても大切なそれ自体のもつ真理や価値といった本質的なものに気付いていけると考える。

そこから、自立のための主体的な行動や思い・願いをもって生活を送っていくことを期待している。

## (2) 生活科でめざす子ども像

上記のことから、生活科でめざす子ども像を以下のように考えた。

- 自分の「なぜ」「どうして」に気付くことができる子
  - 「なぜ」「どうして」を様々な表現しようとする子
  - 「なぜ」「どうして」が自分で「わかった」「なるほど」に変えられることに気付く子、またそれを楽しい・おもしろいと感じる子
  - 変わっていく過程を自分なりの方法で表現しようとする子
  - 変わっていった過程を、これからの課題解決に活かそうとする子
  - それらを他教科・領域そして実生活で活かせる子、
  - ◎自分を振り返り、その成長を感じ、自分に自信をもち、自分でやってみようと、主体的に物事に取り組もうとする子
- これら○のことを子どもたちの素地として養い、「自立をめざして」いくことを願う。

## 2. 生活科学習における「学びをデザインする子どもたち」

### (1) “子どもたちが学びをデザインする姿”とそのみとり

課題解決	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「なぜ」「どうして」の不思議や知りたいことを見付けてくる</li> <li>○そしてそれを「わかった!」「なるほど!」に変えるために、これかどうしていけばよいかの方法を自ら考え、試していこうとする</li> <li>○上記の学習活動を他者と(教師・友だちなど)いっしょに取り組むことができる</li> <li>○今までの学び方を活かして、課題にあった解決方法を「これを使えばいいぞ」と自分なりに考えて、選択し、見通しをもって学習しようとする</li> <li>○「わかった」「なるほど」に変わると次の「なぜ」「どうして」を見付けることができ、次へどんどんとつなげていこうとする</li> </ul>
対話	<ul style="list-style-type: none"> <li>○友だちの様々な考え(表現したもの、つぶやき、発表、話し合い活動など)に触れることにより、自分と異なる考え方がたくさんあることに気付ける</li> <li>○“ひと・もの・こと”に何度もかかわる学習活動を通して“ひと(他者・自己)”の考え・思い・願いに触れることで、単一的にみていた“もの・こと”に対して別の見方もあると気付くことができる</li> <li>○また、家族・地域の人々など自分にかかわる様々な“ひと”の思い・願いなどに触れることで、自分に新たな考えが生まれたと感じることができる</li> </ul>
学び方	<ul style="list-style-type: none"> <li>○友だちや他者と学習活動を進める中で気付いた学び方を自分の課題と合わせてまねしてみようと思ひ、実際に挑戦してみようとする</li> <li>○自分で気付いた学び方を、友だちや家族など他者に知らせることができる子</li> <li>○またその気付いた学び方を絵や文、作品などに表現し、まわりの“ひと”に広げようとする</li> </ul>

○学習活動の中で、学んだことをだれかに知らせたい・伝えたいという「相手意識」をもって取り組もうとしている
*教科目標・学年目標が学習指導要領では、第1学年及び第2学年を通してのものと設定している。上記の図も2カ年を考慮して設定しているが、全く同じものとしてとらえているわけではない。単元目標や様々な場面で、教師は学年の違いを考慮して目標やねらいをたてていくこととする。
生活科の考える“子どもたちが学びをデザインする姿”のみとりと着目児
○行動観察・発言・つぶやき・ワークシート・絵・ものづくり・写真・ビデオなど *学習時間だけでなく、家庭生活でのみとりも重要であるので行っていく。
○着目児は、“子どもたちが学びをデザインする姿”を考え、その単元（単元全体・毎時間を通して）での「課題解決・対話・学び方」のどれかに視点を当て設定していく。

## （2）本年度の実践から「学びをデザインする子どもたち」

1 学期の実践から、学ぶ筋道をまず明確に認識し、それらを次の課題に活かし解決に向かおうとする（「学びをデザインする子どもたち」）姿を「課題を明確にとらえることができたとき」に見られるのではないかと考えた。それは、課題が明確であると考えることに理由や根拠をしっかりと持てるからである。

研究授業では、「どうやってこれなに？をしってる！にかえよう」という漠然とした発問を投げかけた。「インターネット・図鑑・本など」を出していたが、はっきりとした理由や根拠はほぼ持つことができていなかった。これは、教師の発問が適切でなかったため子どもたちは生活・学習経験の中から、理由や根拠を持ち出しにくかったのだと考える。協議会でも「教師が言葉を選び、明確に、はっきりとした発問をすること、そして手立てを講じていくこと」が、「学びをデザイン」していくことにとっても深くかわり重要であるとされた。そこで課題を明確にして再度話し合いをした。



こはる：「先生は知ってるのがある？」

T：「あるよ」

こはる：「えー、じゃあどれ知ってる？知ってるの教えて」

T：「ぜんぶは知らないよ」「そしたら知ってるのは、先生が教えます」

ちあき：「やったあ」

なつお：「いいなあ。教えてもらえて」

まふゆ：「そしたら、ぼくもほかの先生に聞いてきてもいい？」

T：「じゃあ、それぞれの班で（調べたい「なにこれ」）だれに聞くか話し合ってみましょう」という明確な課題を設定。

こなつ：「オレンジのは、保健室の前にあったから、しまむら先生知ってると思う」

とうた：「けど、2階にもあったから、3年生の先生に聞いたらいいと思う」

しゅう：「けど、ハートのマークついてるから、先に保健室の先生に聞きたい」

など、それぞれの班が、理由を話しながら聞く人を決めていった。

このように、課題が明確になったことで子どもたちは理由や根拠をもち話し合いを続けることができた。子どもたちが主体的に課題を明確化していくためには、十分な体験活動の時間が必要となる。なぜなら繰り返し活動することで子どもたちは理由や根拠となる生活・学習経験を積み重ねていくことができるからである。

そして、教師は子どもたちの積み重ねている生活・学習経験をつぶやきや表出物で細か

く“みとる”ことで、授業を構築していくことができる。合わせて「課題は子どもたちの思い・願いが含まれていること」や他教科・領域の関わりも必要である。

これらは子どもたち・教師の学びをデザインしていく手立てとなると考える。

### 3. 研究の展望

研究は2つのことから進めていきたいと考えている。

1つ目は、子どもたちを深くみとり学習活動をすすめていくことである。みとる方法は授業中の発言・行動記録・ワークシート・具体的な表出物などがあげられる。それにあわせて、休み時間の子どもたちの気付きや朝の会・帰りの会でのニュース発表などやまた生活科・他教科以外での発言・気付きも細やかにみとっていく必要があると考える。そしてそのみとったものを丁寧にまとめていく。これらは教師のみとりが深まるだけでなく、子どもたちが、自分はどうのように変容していくかをみとる大きな手立てとなる。

そして、このみとりから子どもたちが主体性をもって学習に取り組むことができるよう課題\*は、子どもたちのつぶやき・思い・願いから出たものを主に設定していくことと考えている。\*学習指導要領の内容や教材の持つ価値を含んでいることが前提である。

また主体的に学習活動に取り組むために、課題設定までの体験や学習活動、また課題解決のためのそれらを繰り返すことも必要だと考える。これは、一人ひとりが“もの・こと・ひと”に繰り返しかかわることで、今まで気付かなかったことに気付く、そして気付きを深めることで、一度だけの体験や活動だけで終わらないことにつながっていく。そして、繰り返すことで学習活動に「みとおし」をもつことができると考えるからである。

2つ目として、生活科を中心とした各教科・領域と関連付けた年間学習指導計画を行っていくことである。学習指導要領では主に国語・図工・音楽などの他教科との関連や合科学習を積極的に行うこととしている。しかし、低学年の子どもたちは、発達の段階を考慮して、国語・算数・・・とすべての教科・領域を関連付けて進めていくことが望ましいと考える。なぜなら、特に低学年の子どもたちは学校生活で起こるすべてのことが学習経験・体験とつながっていくと推察されるからである。生活科だけで“学びをデザインする子どもたち”をめざすのではなく、すべての教科・領域とかかわり合いながら、進めていけるように教師はねらいをもって年間学習指導計画を立てていくことでより気付きを深めることのできる手立てになると考える。

### 4. 研究の評価について

子どもたちが主体的に「みとおし」をもって学習活動に取り組んでいるかを知るために、教師は様々な表現方法を子どもたちに提示していく。絵を描くこと、ものづくりをすること、記号化、色での表現、これらの組み合わせ、様々な表現活動から子どもたちの思いを知ることで、これからの「みとおし」もっているかを探る。また自分の思い・考えがどのように変化していくか、してきたか連続性のある掲示を行い可視化していく。また、思い・願いを十分に表現しにくい場合には、写真やビデオにとって記録しておく。

行動観察・行動記録はとても重要であるため、毎時間とっていく。そして、学校生活だけのみとりではなく、家庭生活の様子、保護者の方の思いなど子どもたちの今までの重要な生活経験なども考慮して支援の手だてとしていきたいと考える。また、生活科で得た学び方が、他教科・領域であらわれているか、またその逆もノート・ワークシート・日記など様々な表出物で見ていく。

子どもたちと保護者の方に振り返りのアンケートをとる。

- 引用・参考文献
- 新小学校学習指導要領解説 生活編 文部科学省
  - 2011 領域提案 和歌山大学教育学部附属小学校 生活科
  - 2009 生活科の理論 高浦 勝義・佐々井利夫著 黎明書房
  - 2009 生活科の授業づくりと評価 高浦 勝義・佐々井利夫著 黎明書房
  - 教師の言葉とコミュニケーション～教師の言葉から授業の質を高めるために～  
秋田喜代美・編 (株)教育開発研究所